

---

# 新機動戦記ガンダムスフィア

紅蓮弐式

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新機動戦記ガンダムスフィア

### 【Nコード】

N1196F

### 【作者名】

紅蓮式式

### 【あらすじ】

新西暦2104年末期に勃発した戦争を終らすと言う親友との約束を成し遂げる力を入れた少年・鳴海渚は戦いに身を投じる。

## T U R N I O プローグ（前書き）

モバイルスーツやキャラクターはすべてオリジナルです。下手ですがそれでも構わない方はどうぞ

## TURN-10 プロローグ

地球は二つの勢力の分かれていた。

一つはアメリカを中心に世界を一つにまとめる必要があると主張する統合軍。

そしてそれに反対するアフリカを中心の国家が集まった独立軍。

新西暦2104年末期について二つの軍は戦争を引き起こした。

それから三ヶ月がたった新西暦2105年二月。独立軍は人型機動兵器、MS「コード」の実戦投入を決定。これにより当初、優勢を

保っていた統合軍が各地で次々に敗北を繰り返し半年が経とうとしていた。

統合軍・カルフォニア士官学校

「君達二人はこれより准尉の階級が与えられる。」

士官服を着た男が次々に文章を読み上げる。少年・鳴海渚と東条悠なるみなぎさ とうじょうゆ一ういちの二人は服装を崩さずその声を静かに聴く。

「で、私にとっては不本意だが、君達には我が軍の最新鋭のMS。ガンダムシリーズの二機が与えられる。」

ガンダム。

その言葉を聞いて渚は拳を握り締めた。

式典も終わり、悠一と渚は格納庫は自分の相棒となるMSの前に経った。

「渚」

不意に悠一の声が聞こえた。

「俺さ、この戦争が始まってから毎日、流れるニュースが嫌いだった。でもこれで戦争を止める力が……。だから、一緒に戦争を終らせようぜ」

渚は「ああ」と返した。

『鳴海准尉及び東条准尉は直ちにギャラハッドに乗艦してください』

そして二人は握手して、戦争を終らせる事を誓いあった。

## TURN - 1 戦い

インドネシアにあるカリマンタン島の独立軍基地。

「ケイ・ムーカ上級大尉、イランダ・タール中尉。二名入ります。」

二人がその部屋に入ると一人の老人が居た。彼はこの基地の最高責任者のイスルギ・ロウカだ。独立軍では有名な指揮官だ。

「すまない、いきなり呼び出して」

イスルギはそう言う二人は敬礼した。

「君達を呼び出したのはニューギニア島ことなのだが・・・」

その言葉を聴いてケイはピンツと来た。唯一、独立軍の攻撃を尽くしつづ退いている統合軍の部隊の存在に。

「それがどうかしたのですか？」

ケイは問う。するとイスルギが書類をだした。

「殲滅せよと、命令が出された。今回の総指揮をケイ上級大尉、君に一任しようと思う」

「自分がですか？」

「ああ」とイスルギは頷いた。そして二人はその任務を承諾した。それが三日前

ニューギニア島、統合軍基地

『全軍に告げる！敵はマルク諸島を経由してこちらに進軍をしている。戦力的有利は望めない、三時間後には援軍も到着する！この戦いに負ければ我々にはないっ！』

そう言うのはカノン・ヴァステイ少佐、統合軍の無敗の名将とも呼ばれ、両軍に名が知れている。カノンはガーターのコクピットで息を漏らした。

「これで士気があがればいいが・・・」

「大変ね・・・」

カノンの後方のガーターに乗っている少女・フェイト・S・ルリア

はカノンに呟いた。

「ああ、大変だよ。それと死ぬなよ」

「ええ・・・」とフェイトは頷いた。

カノンは操縦桿を握ると何処かで爆音が響いた。そして戦闘が始まった事を実感した。

『ラズロー隊はそのまま直進、グラスゴー隊はハリー隊の後方で待機。』

ケイは的確に指示を出す。彼もカノン程では無いものの指揮官としては十分の力量は持っている。

「タール！私のガレスの準備させてくれ、私も出来れば前線で指揮を執りたい」

さすがは大尉とタールは思った。今の戦力だったら出撃する必要もないのに自ら戦線に出るとは普通の指揮官ではあまり見られない

「了解です。上級大尉」

敬礼すると、ケイに言われた事を整備士に伝えた。

「はあっ！」

カノンの駆るガーターは対MSナイフを独立軍のガレスに突き刺し、距離を離す

ドゴォーン！

爆散するガレス、カノンのガーターはそのままアサルトライフルを構えて連射する。

「ローズ隊はここで待機、ヴァイト隊とクリウス隊はこのまま進軍」すでに戦闘開始から一時間は経過していた。カノンの大隊は善戦をしていた。

「二番機と三番機は掃射！四番機と五番機は散開して近接戦闘に持ち込め！」

ライフルを連射しながらの指示、「これはこれで疲れる」と内心で

眩いた。

「上級大尉、一応指示通りに各部を調整しました。近接装備として対MSランスの使用許可が下りたので装備させました。」

ケイはガレスのコクピットに乗り込むと「感謝する」とだけ整備士に伝える。

「指令代理、現在の戦況は？」

はいっ！と慌てて男が現れた。

「げっ現在、数十機がこちらのMS部隊を全滅させています」

「分かった。私が出撃したらラズロー隊に合流する様に伝える」

「了解しました」

ケイは操縦桿を握り、MSを動かし加速させる。

「こちら、ケイ上級大尉だ。ガレス出るぞ！」

対MS用ランスを構えながら、漆黒の機体がイージス艦から飛び出した。



## TURN - 2 深緑の狙撃者

ケイの駆る漆黒のガレスが統合軍のガーターを貫いた。

「これで二機目！」

ケイが出撃した事により戦況の風向きが変わった。

「コード真似た機体で何が出来る！」

そして再び黒い機体からランスが飛び出し、ガーターが爆散した。

『カノン隊長！こちらに向かっている機影が。何？うあああっ』

「おい！キール。」

カノンへの返事はない。キールの位置にはLOSTの文字。

「各機散開！常に二人一組で行動しろ！いいな？」

『了解！』』

カノンは機影を確認しながらガーターを前進させ、そして気がついた。

「しまった！」

すでに独立軍の勢力範囲に居た事に

「敵陣の中に単機でくるとは！」

タールのガレスがランスを構え、加速する。

『やめろ！タール、そいつはっ！』

「たった一機」

これでえっ！とこの勢いならたった一機、撃破するのも簡単だった。コクピットから伝わる強い衝撃。

だがその衝撃はタールのガレスを襲った。

「なにっ！？」

「こんのおッ！」

ガレスから放たれたランスをガーターが蹴り飛ばした。

そしてそのまま右腕に装備された携帯火器・アサルトライフルが火を噴いた。

「これでえっ！」

動きの止まったガレスを蹴り飛ばし距離を離す。

ドォーン！

ガレスは爆散、そして地に刺さったランスをカノンの駆るガーターが構えた。

「なんと！タールがやられたか」

ケイはコクピットで呟いた。操縦桿を握り直す。

「だが、私は強いぞ！」

ランスを手向けての加速、先程タールと同じ行動だが両手ではなく片手で構えている。

ガンッ！

ランス同士がぶつかり、お互いに距離を離しながら睨みあいが続く（これで！）

そして再び、ケイはガレスを加速させた。

「俺は・・・まだっ！」

加速する漆黒の機体に向けて鹵獲したランスを突き出す。

ガシンッ！

ケイの駆るガレスは頭部を、カノンの搭乗するガーターは左腕をそれぞれ失いながらも激突を繰り返す。

「ここであっ！」

ガーターは距離を伸ばすため、跳躍する。

「甘いっ！」

ガレスは斜め上に向けてランスを突き出した。

「何！」

そしてそのランスはガーターの脚部を貫いた。

「ここまで・・・か」

カノンは中破したガーターのコクピットの中で呟いた。味方の増援は望めない。それに自分の機体は行動不能、その上周りにはガレスが五機確認されている。

本当に終わった・・・

カノンは死を覚悟した。

『隊長、こいつどうします？』

後方に待機していたガレスのパイロットがケイに問う。すでにガーターには銃口が向けられ、抵抗できないようにしてある。

「捕虜だな」

『了解です』

指示をだし、ため息を吐いた。

「無敗の名将カノンもここまでか、どうせなら同じ条件で戦って見たかったな」

操縦桿を握るとピピッ！と音が鳴る。通信だ

『上級大尉！大変です、未確認のMSがつ！』

「分かった。」

私もそちらに、と言いかけた瞬間、横に居たガレスが紅い閃光に貫かれた。そして上空にメインカメラを向けるとそこには蒼白のMSがスナイパーライフルを構えていた。

「ふう、なんとか間に合ったか？」

悠一は呟いた。操縦桿を握り、照準を敵機に向け、通信モニターを開く

「そこガーター！動かせるか？」

『こちら、カノン。だめだ脚部がやられてる<sup>あし</sup>』

「了解した。こちらで対処する。じつとしててくれ」

再び紅い閃光がガレスを貫いた。

「すごいな、さすがファクトガンダム」

悠一は自分の機体を賞賛しながら引き金を引いた。

「あれはビーム？各機散開！」

ケイは損傷したガレスを動かしながら狙われないように動き回る。五機いた機体もすでに二機を失っていた。

「これ以上、MSを失う訳には！」

ケイはランスを再び構え、高く跳躍する。

「おいおい、俺に接近挑むなよ」

悠一はガレスに向けてスナイパーライフルの銃口を向け、そしてビームの弾丸が発射された。

「ここまでか・・・脱出する」

ケイはガレスの脱出装置を作動させ、戦場から離れた。

ファクトガンダムを地上へ下ろし、カノンの乗るガーターへ近づける。

「こちら、東条准尉です。カノン少佐ですね、よかった間に合って」

『まだだ、俺の部隊が』

「大丈夫ですよ、少佐」

『えっ？』

「そつちにはもう一人の奴が行ってますから。」

そう言つて悠一は笑みを浮かべた。

### TURN - 3 真紅の剣

独立軍の本陣目前にカノン大隊が攻撃を繰り返していた。統合軍の見事な陣形や戦術で戦力では確実に上回っている独立軍も難色も示していた。

「フェイト副隊長！隊長の機体は無事、保護されたとの事です。」

いきなり自陣から通信。フェイトは「えっ？」と驚きの声を上げる。「どこの部隊がそれを確認したの？」

「それがその・・・」と言いかけた直後、通信モニターからオペレータの顔ではなく少年の顔が現れた。

「自分はギャラハッド所属、スフィアガンダムパイロット、鳴海准尉です。」

「ガンダムって、我が軍の最新機？」

「はい、すでに自分の相棒がカノン少佐の救援に成功しました。副隊長はそのまま戦線を維持してください。」

「了解した。各機、准尉の言葉を信じ、このまま戦線を維持する。」  
数機のガンターはアサルトライフルを再び構え猛攻を開始した。

統合軍・本陣

「悠一、今のでいいんだな？」

「ああ、少佐は俺が保護した。あと戦闘を終らすだけだ」

「分かった。」

真紅の機体・スフィアガンダムを機動させる。

「本陣は救護班の手配をお願いします」

それだけ伝えたと稲妻の如く、紅い機体が発進した。

数で押され始めたカノン大隊、戦線をギリギリまで維持しながらフェイトのガンターはライフルを連射する。

「さすがにこれ以上は、くっ！」

撤退せざる終えない、そう皆が判断したいた。

「ですが副隊長、鳴海准尉はどうなるのですか？」

ガーターのパイロットのイザベル・ミカギが呟いた。

「それは・・・」

続きの言葉が出なかった。通信モニター越しだが顔は見た。まだ幼さがあつた。ここで自分達が引けば、あの少年は一人で戦うことになる。

「もういいです。私はあの少年を待ちます。」

「イザベル！」

フェイトの制止を聞かず、ガーターを移動させアサルトライフルを構え連射する。

ドンッ！

衝撃が走る。イザベルの位置を見ると機体は先程の攻撃で行動不能になっている。そして数機のカレスがイザベルのガーターに照準を合わせる。

『撃てえっ！』

独立軍から兵の声、そしてカレスの銃が火を噴いた。

来るはずの衝撃はイザベル機には来なかった。もちろん攻撃が消えた訳でもない

「よかった。無事ですね」

少年の声そして膝を着いた紅い機体がシールドですべてを防いだのだ。イザベルはすぐ返事をした。

『その声、鳴海准尉？』

「はい、あとは自分がやります。」

スフィアガンダムは立ち上がり、シールドを投げ捨て、腰部から二本の棒を引き抜く。その先端からはビームの刃が形成されている。

「敵MS数は十五、初陣にはいいか」

スフィアガンダムはまず近い位置する機体に狙いを絞った。

『なんだ、コイツ』

独立軍パイロットからの驚きと恐怖の声。

だがそれに耳を傾ける訳にはいかない、渚のガンダムは敵MSの懐に入り唯ビームサーベル振るう。

「これで残り、十機！」

機影を確認する。そして囲まれている事に気づいた。

『どんなに強くても一斉攻撃なら』

一人のパイロットの叫び共に一斉に接近する。スフィアガンダムは二方向にビームサーベルを投げる。囲んでいた十機の内、二機のガレスを貫いく、だがそれでも攻撃の手を緩めない。

そして腰にマウントされているビームライフルを連射する。

「くっ！間に合わない！」

両翼に展開するガレスの突進。

『『ここであつ！』』

独立軍・二人のパイロットの声。だがその攻撃は届くことはなかった。

ビームがその二機を貫き、爆散した。ビームを放った張本人・ファクトガンダムの姿。

『渚、油断は禁物だぜ？』

「ああ、悪い、悠一助かった」

その直後、独立軍側から信号弾が放たれ、この戦闘は終了した。

## TURN - 4 クロス ベル

「ありがとう、君達のおかげでなんとか勝てた。感謝する」

カノンはそう言うのと二人に頭を下げた。

「いえ、当然のことをしただけです。」

「でも君達がいなかったら」

「任務ですから、それとこれを」

悠一は書類を取り出し、カノンに差し出す。

「これは？」

「クロス・ベル編制に関する書類です。」

「クロス・ベル？」

「はい、詳細はギャラハッドがこちらに来たときに。しばらく僕達は行動を共にすることになりますと思います。」

「分かりました。ではしばらくお願いします。」

カノンが手を差し出す。悠一はその手を取り、握手した。

基地の第二格納庫

渚のスフィアガンダムは損傷したガーターと共にここに収納されている。

「ああ、見つけたあ」

女性の声、コクピットで作業していた渚は顔をヒョイとだす。

「キミィ、このMSのパイロット？」

声のしたの方向に顔を出す。そこには茶髪の少女が手を振りながら立っていた。

「僕ですかあ？」

「そ、だよ」

返事が返ってきた。やはり自分だった。

「上に上がっていい？」

「どうぞ」



渚はガンダムを機動させ、手の平にその少女を乗せる。

「おお、すごいね、このMS」

「ええ、統合軍の最新機種ですから。ところで貴方？」

「ごめん、自己紹介がまだだったね」

少し間を開けて、すうっと息を吸って

「私はイザベル・ミカギ、階級は少尉。さっきは助けに来てありがとう」

「僕は鳴海渚です。怪我とかはしてませんか？」

大丈夫だよ」とイザベルは言う。

「でもな、私のガーターは壊されちゃってさ」

「すいません」

「いやいや、謝らなくていいよ。君のせいじゃないし」

ポケットから振動が伝わってきた。

「あつ、ちよつとすいません」

渚のポケットから携帯を取り出す、着信相手はファクトガンダムパイロットの悠一

「もしもし」

『よう渚、ちよつとお願いがあるんだけどさー』

「またか、なんだ？」

『ギアラハッドの迎いに行ってくれないか？』

「分かった。これで貸しは389個な」

『えっ！そんなに？』

「じゃーな」

ブチッと電話を切ると携帯をポケットにしまう

「ごめんなさい、ちよつと用事があるんで」

「ちよつと、まったあつ！」

コクピットハッチを閉じようとしたときイザベルが身を乗り出し、コクピット内に入る。

「あぶないじゃないですかあー！」

「ごめん、あたしも連れて行って」

満面の笑みを浮かべるイザベルに渚はため息しか吐けなかった。

「申し訳ありません」

ケイはイスルギに深く頭を下げた。

「死者43人、負傷者295人。大破したMSは52機。本来なら降格処分になるが、残念ながら君は昇格だよ。」

はっ？とケイは呆気に取られる。自分の降格は覚悟していたが、まさか昇格するとは思わなかった。

「どうして昇格なんですか？」

当然の疑問を聞く、するとイスルギはファイリングされた書類を取り出す。

「君は統合軍の最新型のMSを見たそうだね」

「はい」

「本国がその情報を欲しがっていてね。何でも特別調査隊を結成するそうだ。君も明日よりそこに転属なる。」

「特別調査隊・・・ですか？」

「まだ正式名称は決まっていらないらしいがな」

「分かりました。ケイ上級大尉、特別調査隊に参加させていただきます」

そう言うケイは敬礼し、ファイルを受け取り、その部屋を後にする。

そのファイルには「GUNDAM」と書いてあった。

## TURN - 5 もう一つのガンダム

ニューギニア島に強風が巻き起こる。

「これが・・・世界初の浮遊航空母艦」

「クロス・ベルの拠点となる。ギアラハッドです。」

ギアラハッドと言う白銀の城が舞い降りた。

『鳴海准尉、ご苦労だったな』

初老の男性ギアラハッドの艦長であるギリウム・ルースの顔が通信モニターに移しだされる。

「いえ、それより収容をお願いしていいですか？」

『おお、そうだったな。第三ハッチを開く、そこへ』

「了解です。」

渚はスフィアガンダムのコクピットハッチ開き、マニユプレーターを近づける。

「イザベルさん、ここで降りてください。」

「ええー！」

「我がままを言わないでください。それにコクピットは狭いんですから！」

舌打ちするイザベルをよそに、少女をスフィアガンダムの手の平の上に乗せ、そっと降ろす。そして開かれたハッチに向かって真紅の機体は歩きだした。

ギアラハッドの艦内は現地の軍人と合わせて、活気に溢れていた。

「おいっ！悠一、ファクトガンダムは三番デッキだっ言ってんだろ！」

「オチャッンは細かい事は気にすんな」

まったくと呟く中年の男、エーカー・ルージュ。

「あはは、大変ですね」

冷や汗を掻くカノン。

「あんたがカノン・ヴァステイ少佐だな」

「はい、そうです。」

「ちよつと着いて着てくれ、あんたに渡したい物がある。」

はいつと返事をする和一冊の本を渡され、カノンは歩きだすエーカーに連れられ、艦の奥へ着いていった。

「うわあ、すごいですよ。フェイト大尉」

「ええ、そうね」

感嘆の声を上げるイザベルに冷めた表情で見るフェイト。彼女達の目の前では数機のガーターとMSに飛行能力を授ける羽・フロートユニット

「では皆さん。これからフロートシステムの把握と操作の訓練を受けて頂きます」

これにはさすがのイザベルも「はあ」とため息を着くしかない

「着いた。」

エーカーに連れて来られた場所。そこには一機のMSが収容されていた。

紫を基準にした機体色、ガーターではなく特徴的なVアンテナ。どちらかと言うと渚達が乗っていたガンダムに近い

「型式番号TG-02シユタルケガンダム。渚の乗るスフィアガンダムと悠一の乗るファクトガンダムの同シリーズだ」

エーカーの簡単な説明を受け、機体にそつと触れる。

「なんでイルファちゃんがあんたに託したかはわかんねーけど大切にしろ」

「イルファさんて誰ですか？」

「簡単言えば、TGシリーズの開発総責任者だ。」

じゃーな、と言って姿を消してたエーカー。カノンはすぐシユタルケガンダムのコクピットに入った。

『これよりブリーフィングを行います。主要の方々は第一ブリーフィングルームに集まってください』

そう女性の声で流れる艦内アナウンス。

「なあゝ渚」

気の抜けた声、声の主は分かっている。だが渚はそれをあえて無視し、作業に没頭する。

「さすがはイルファさん、よく対艦刀を用意してくれた。でも機動性がすこし落ちるな」

「おいっ！」

痺れを切らした悠一は声を荒げる。

「ちっ、なんだよ悠一。」

「舌打ちしやがったな、テメエー、まあいい。それよりブリーフィングでるか？」

「いや、出ない。コイツを対艦刀に対応させないと。」

そう言つて、スフィアガンダムを指差す。

「分かった。艦長には言つとく」

「ああ、助かる」

「では、ブリーフィングを始めましょうか」

出席したのはギアラハッド艦長のギリアム。カノンとカノンの副官フェイト。そして東条悠一。

「今の状況を東条准尉、説明を」

はいつと悠一は立ち上がり、すべてを説明した。ギアラハッドの目的、次の任務の事。そしてクロス・ベルの詳細。

「と言う事は私がクロス・ベルMS部隊隊長ですか？」

「ああ、そう言う事だ。その為のシユタルケガンダムだ。」

カノンの言葉をあつさりと肯定の意を示すギリアム。

「分かりました。クロス・ベルMS隊の隊長をやらせて頂きます。」  
カノンはギリアムに向かって敬礼をした。これにより特別攻撃MS

部隊の結成が成立した。

## TURN - 6 出撃

ギアラハットの艦内にある無数の部屋の一室。その一室に渚はパソコンを持ち込んで次のミッションに關しての分析をしていた。次の任務はインド洋海上の独立軍艦隊の殲滅で、現在ギアラハッドもその海域に向けて航行中。

トントンとドアを叩く音。渚は「どうぞ」と言うところにはイザベルが立っていた。

「どうしたんです？」

渚が尋ねるとイザベルは涙目で言った。

「フロートシステムの使い方がわからない」

渚は年上か年下か分かんない女性を小突いた。

「なあ、おつちゃん。このファクトガンダムの脚部に搭載されるミサイルってさ拡散式って本当か？」

悠一はMSデッキでエーカーに呟いた。

「ああ、イルファちゃんがそう言ってたから間違いねえんじゃないか？」

「またそれが。イルファさんにはっかに頼ってねえーで自立しろ、自立。」

「うるせえ！」

バコンッ！

エーカーのスパナが悠一にヒットする。

「いつてえー、なぐんなよっ！」

「誰のせいで自立できねーと思ってんだよ！」

「えっ？」

その時、悠一の頭の中でエーカーに出会ってから今までの事が走馬灯のように蘇った。

「あつ、俺のせいだったのか……。ごめん」

エーカーに悠一は深く頭を下げた。

『これより本艦は警戒態勢に入ります。MSのパイロット達は自機で待機してください。』

聞こえてくる女性のアナンス、瞬間に悠一の目つきが変わる。

「おっちゃん、すぐに準備を、スナイパーライフルをは実弾で頼む。」

「おうよ！」

悠一はパイロットスーツに着替え、コクピットに飛び移った。

パイロットスーツに着替え終えた渚は自分の機体・スフィアガンダムのコクピットに入るとすぐさま対艦刀用にOSを書き換える。

「エーカーさん、対艦刀は？」

「カタパルト近くにある。」

渚はうなづくとハッチを閉め、ガンダムを機動させる。瞬間、通信モニターが開いた。

『鳴海准尉、君はサポートに回ってくれないか？』

「どうしてです？ギリアム艦長」

『この戦いでMSの確認されていない。ならカノン少佐達に経験を積ませるのがベストでは？』

なるほど、と渚は内心で呟いた。

「了解しました。サポートに徹します。」

『頼むよ』

「はい」

通信モニターからギリアムの顔が消えた。メインモニターに視線を戻すと快晴の蒼い空が広がっていた。渚はスフィアガンダムの手をしたに伸ばし対艦刀を背中に背負わせる。

「スフィアガンダム。鳴海、出ます！」



## TURN・7 インド洋の戦い

『カノン少佐。貴方方の任務は敵艦隊の殲滅です。数は巡洋艦級が十隻に空母級が二隻』

「分かっています。でも戦闘機部隊が出たって話が・・・」

『その件に関しては鳴海准尉が現在、対処しています』

「そんな、たった一機で？」

『発進のタイミングはそちらにお渡しします』

「では、行きます！」

カノンは紫の機体をゆっくりとカタパルトの位置に近づける。渚や悠一に比べれば少しぎこちない動きだが今回の戦闘上は問題ない。

「シユタルケガンダム。カノン・ヴァステイ、出る！フェイト、イザベルは私に続け！」

カノンのシユタルケガンダムは蒼い空目掛けて飛翔した。

「そんな、旧式の戦闘機で！」

スフィアガンダムは照準を独立軍の戦闘機に合わせて、次々に落としていく。

再度、機影を確認。独立軍機の機影はない、後方に三つの機影は友軍機。

「あとをお願いします。」

渚はスフィアガンダムを通り過ぎるシユタルケガンダムとフロートユニットを装備したガーターに向けて、コクピット内で静かに敬礼した。

「フェイト機とイザベル機の二機は右舷の艦を、僕は左舷に向かう！」

『了解』

シユタルケガンダムは腕に装備されているトンファーを出し、ビー

ムの刃を形成する。

そしてそのまま加速させ、手前のイーゼス艦の艦橋を貫く。

「これで一隻。」

爆発する戦艦を後に紫の機体は次の標的に向かって飛んだ。

「イザベル、対空砲火が強いわ、気をつけて！」

『分かってます。』

フロートユニットを装備したガーター、これまで統合軍のMS操縦技術に航空戦闘方の訓練は受けていない、故に統合軍のどんな熟練なパイロットでも動かすのが精一杯でそれに加え、数日しか訓練を受けてない二人。その後方には渚の駆る、スフィアガンダムが待機している。

「鳴海准尉、今よっ！」

フェイトのからの合図。それと同時に対艦刀を抜刀し、その刃で敵戦艦を両断する。

「これで五つ目！」

イザベルが沈む戦艦を見つめながら呟いた。

「艦長！ダリウスが撃沈。もう動ける艦ふねがありません！」

独立軍艦隊の空母級の艦長に告げる将兵。

「あれが空を舞う艦ふねとガンダムか……。全乗組員に告げる！総員退艦と」

「艦長！こちらに接近する機影が！」

「何！」

艦長は視線を外に戻すとそこには紫に染まった機体。

『ごめんなさい』

とMSから聞こえる声。

「ふっ、ここまでか」

そしてシユタルケガンダムの刃がそのまま炸裂した。

「戦いつてのは酷いもんだな」

海上の火の海、炎に照らされるスフィアガンダム。自然に操縦桿を握る力が強くなる。

『渚』

モニターに移る悠一の顔。

「ああ、分かってるさ。」

『そうだ。だから俺達は』

「戦争を終らす」

それから数分後、ギアラハッドから信号弾が放たれた。

## TURN - 8 新剣

「お疲れ様です。カノン隊長」

ガンダムから降りるカノンに言う渚。カノンは何処か苦しそうに、ヘルメットを取る。

「あんなの戦いじゃない」

カノンはそう呟いた事を渚は聞き逃さなかった。

「カノン隊長の腕前は？」

制服に着替えて、艦内の通路を歩いていると悠一は渚に尋ねていた。

「ああ、かなりの腕前だ。実力は認める。けど・・・」

「けど、何だ？」と悠一を問い詰めた。

渚は少し考えて、脚を止めて腕を組んで言った。

「あの人はまだ覚悟が出来てないと思う」

そうかあ、と悠一は呟いた。

「でも、どうやったら覚悟を決めてもらえると思う？」

無駄だろうと思いつながら渚は悠一に尋ねて見た。

「さあな」

と予想通りの言葉が返ってきた。渚は溜め息を吐いて、歩き始めた。

「へえ、あなたがケイ上級大尉？」

アフリカにある基地で十代ぐらいの少女の対応に困るケイ

「君は？」と何度尋ねてもこっちの話しを聞きやしない。ここに居ると言う事はおそらく軍人なのだろう。そう考えている内に、指示された格納庫へ到着してしまった。

「君、いい加減にしてくれ！」

痺れを切らしたケイは声を上げる。その少女は「あう」と俯いていた。

「悪いな」

そう言つて足を動かし、格納庫の中へと進む。中は真つ暗で目の前さえ見えない。

そつと、一步また一步と足を踏み出していく。

ぱあっ！と一斉に明るくなり、少しづつ目が馴れると目の前の五機のMSが並んでいる。細部の形状は異なるものの、ガレスには違い無かった。

「どう？驚いた？」

「えっ！」

声のした方へ振り向く。にっとな満面の笑みを浮かべる先程の少女。

「君は・・・」

呆気にとられるケイ。少女はゆっくりと近づいていく

「c o - 2 d a、ガレスプラス。ガレスを私なりに弄つて、強化改良したMS。開発したばかりのリニアライフルとビームサーベルの開発過程で生まれたプラスマサーベルを搭載した機体よ」

そう説明する少女をケイは見つめる。

「君は？」

「私はあなた達特別調査隊の技術主任。エイミー・リアよ。よろしく、ケイ・ユウキ上級大尉」

そう言つてエイミーは敬礼する。

「よろしく頼む」

と、ケイもエイミーに敬礼する。

これである機体にも対抗できるとケイは何処かに確信を抱いていた。

## TURN - 9 故郷へ

「失礼します。」

数日がたったある日、二人はギャラハッドのブリッジに呼び出された。

「よく来てくれた、二人とも。」

かつて歴戦の猛者と謳われた艦長のギリாம்は上から二人を見下ろした。

「用件は？」

挨拶も何もせず渚はすぐに聞いた。悠一から「おいっ！」と小突かれながらも真剣な目で見上げる。

「相変わらずだね、鳴海准尉。君は少しゆとりを持った方がいい。そう思わないか？」

「ゆとりなら持っているつもりです。」

渚はそう淡々と答えとギリாம்はやれやれ、と言った感じでモニタ―に世界地図を移した。

「今、我が艦はタスマン海を航行している。そろそろ、補給に立ち寄りたいと思つてね。日本に進路を取るつもりだ。」

「日本にでありますか？」

「そうだ、東条准尉。だが、日本の今の現状は大変な事も知っているだろう？」

そうギリாம்が言う通り日本の隣国の殆どが独立軍に侵略されたのだ。次の標的が日本になっていると統合軍も読んでいて、厳戒体制を発令していた。

「つまり、我々も防衛戦に参加するかもしれない・・・と言う事ですな？」

渚がそう問うとギリாம்は再び話し出す。

「かもしれない、では無く絶対と言っても過言ではないと私は思っている。」

その言葉を聴いて渚は拳を強く握った。

「君達の故郷だ。ある程度、権限を行使を出来るよう手配はして見る。まあ、無理だと思うけどな」

はっはっはっ、と豪快に笑うギリラム。渚と悠一の二人は顔を見合わせ

「ありがとうございます。」

そう艦長に伝えて、二人はブリッジを後にした。

ガーターを二機、確認。まだ視認はしてないがセンサーが反応している。

「リニアライフル、どれ程の威力か」

携帯している火器をロングバレルに切り替え、狙撃体勢に移行する。

「5・4・3・2・1」

ピッピッ！と警告音が鳴る。そして

「GO！」

ケイの機体から閃光が放たれる。発射された二発は一機のガーターに直撃。

「やっぱり、私に狙撃のセンスは・・・と、落ち込んでいる場合ではない！」

仕留め損ねた一機がナイフを構えて突撃してくる。ケイはあの時の戦いを思い出した。

あの機体は、確かに近接武装を蹴り飛ばしていた。

「行くぞ！」

機体を加速させ、自ら突っ込む。

ガシンッ！

ケイのガレスがガーターのをナイフを蹴り飛ばし、腰部にマウントされているプラズマサーベルを抜刀。

「はああっ！」

横薙ぎに払う。目の前で敵軍のガーターが爆散する。

『シュミレーション、終了。』

その言葉を聞いて、ケイは深呼吸した。

「さすがね、ガーターを十機をたった五分で全滅させるなんて」

そうエイミーはコクピットから降りて着たケイに近づいて言った。  
だがケイは違和感を感じていた。何かが足りない

「何か、感想は？」

「いい機体・・・だけど」

「だけど？」

「何かが、足りない」

「そう・・・」

ケイの感想を素直に受け取るエイミー。ケイはそつとガレスプラスに触れる。

（これで、あの機体に対抗できるか・・・いや、対抗してみせるさ。）

それから数分後、ケイに新たな任務が下された。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1196f/>

---

新機動戦記ガンダムスフィア

2010年10月12日02時52分発行